

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
(実社会対応プログラム)

研 究 成 果 報 告 書

「民間所蔵文化財の資源化・流通による学術観光創成の実証的研究」

研究代表者： 安藤 美奈

(東京芸術大学 戦略IR室 特任助教)

研究期間： 平成25年度～27年度

1. 研究基本情報

課題(研究領域)名	観光の人文・社会科学の深化による地域力の創出
研究テーマ名	民間所蔵文化財の資源化・流通による学術観光創成の実証的研究
責任機関名	国立大学法人東京芸術大学
研究代表者(氏名・所属部署・役職)	安藤 美奈 戦略IR室 特任助教
研究期間	平成25年度 ~ 平成27年度
委託費	平成25年度 717,200円
	平成26年度 4,946,600円
	平成27年度 2,708,200円

2. 研究の目的

近年、日本では様々な分野のアートを活用したイベントが盛んに開催されている。こうしたイベントは、地域経済に貢献する観光資源としても注目され、多くの都市や地域で“祝祭化”の期待が高まっているが、各地で多数開催されることにより、結果として同類の作品やパフォーマンスに集約され、イベントの非日常性が希薄化する傾向が見受けられるのも事実であり、今後は開催する地域に立脚した独自性を含め、イベント自体の明確な差別化が求められると考えられる。学術がこうした実社会で進行する問題に対して、どのように貢献することができるのか。現在のアート・イベントは、外部から最新のアートを持ちこみ、地域の環境と対比する手法が主流となっているが、他の地域との差別化を図るには、場の記憶、地域の歴史の再評価をもって、地域の特性をより明らかにすることが必要である。地域住民を含めたイベントの参加者に、学術的な視点で評価、整備された場の記憶、地域の歴史を提示し、観光行動を起動させることが、外部からの革新性ととも、アート・イベントを継続させ、さらに活性化させる要素として必要であると考えられる。

このような背景から本研究では、観光行動へと展開するための一つの軸として、地域で公有化されずに継承されてきた歴史、芸術文化を発掘、再評価することを提案した。研究対象を100年以上の歴史を有する日本の宿泊施設、いわゆる老舗旅館やホテルとし、比較検討例も含め地域の歴史に関わる国内外の施設について、ヒヤリング及び視察調査を実施、これらの施設が公有化することなく継承してきた歴史的芸術文化的資料や作品(以下、文化財)を、学術的に再評価して芸術文化及び観光資源化し、資源を流通させることを試みた。本研究は、観光関連企業、団体との協働、文化施設やジャーナリズム、マスメディアとの協調を行いながら、より深く旅をする観光者としての観光行動の創成をめざした実証研究でもある。また、本研究はアート・マネジメントの視点に立ち、資源化プロセスと流通マネジメントを示すことによって、業態の拡大に主眼をおいてきた観光事業の観念や枠にとらわれない、学術の立場からの観光行動の拡充深化を目指している。

3. 研究の概要

研究プロジェクトチームの体制

本研究チームは、アート・マネジメント、文化政策の研究者をはじめ、博物館や観光旅行業などの実務者で構成されている。また本研究チームメンバーの主宰する文化観光研究会(一般社団法人芸術資源マネジメント研究所)、<小さなアートのまち>プロジェクト(同研究所)の活動を通じて、情報共有と事例分析を進めた。事例収集にあたっては、関連する分野の研究者とともに、視察対象となった施設の運営者及び管理団体、所有者、自治体関係者や観光協会、まちづくりに関わるNPO、ジャーナリスト、建築やコンサルティングの専門家など多くの方々の支援と貴重な助言を賜った。また資源化や流通プロセスにおいても、地方

の文化資源の発信やアーカイブ活動の専門家、編集者、デザイナー、観光業および鉄道関連企業、一般社団法人など多くの実務者からの協力を得て、本研究プロジェクトは実施された。

研究の内容

本研究では、経済・行政・政治などの面で歴史的に地域に貢献してきた民間事業者の代表的な例である、日本の歴史的な宿泊施設いわゆる老舗旅館、ホテルを研究対象とし、それらの公有化することなく継承してきた文化財について、第三者に提示できる、利用可能な状態にするという意味での資源化を検討した。江戸や明治期から現代に続く旅館やホテルは、地域の歴史とともにあって、旅行という観光行動には欠かせない施設であり、日本文化の装置の一つである。またこれらの施設は、地域の歴史資料だけでなく、投宿した文化人、政財界の重鎮など様々な文人墨客との交流を通して、有形無形の芸術文化資源としてふさわしい文化財を多数所蔵し継承してきた。しかし昨今の地方経済の低迷、多発し甚大化する自然災害とその対策など、施設の経営環境は厳しさを増している。経営環境の変化により、施設は事業の継承、継続に多くの問題、困難を抱えることとなり、デジタル化された所蔵目録などもない所蔵文化財は、散逸、消失の危険性が高くなっている。このような危険性を回避するためにも、本研究では、施設が所蔵する文化財に学術的な検討を加え、芸術文化資源として地域に還元し、地域の独自性を語る背景、要素として活用、観光資源として新たな観光行動の創成を提案した。具体的な研究のプログラムとしては、次に説明するように事例収集と検討を行う理論的なアプローチと、資源化プロセスと流通マネジメントの実践的アプローチを試みる2つのプログラムを実施した。

① 理論的研究プログラム

地域振興に向けた観光プログラムにおいて、民間が所蔵する文化財の活用事例は、自治体や公共団体含め個人やNPOなど、関係する地域主導といった形で進行していることが多い。しかしそのような活用事例について、「その構造を一般化し、問題を共有化する取り組みは乏しい」(研究チーム 美山)と言える。そのため、本研究チームでは、民間が所蔵する文化財が観光資源化されている、または観光資源化を試みようとしている事例を収集、調査することとした。前出の文化観光研究会、<小さなアートのまち>プロジェクトの協力を得ながら、研究チーム内で保有する事例を共有し、デスク・リサーチ、フィールド・ワーク、関係各者へのヒヤリングを含め、国内外の事例を収集した。なお、事例収集については、研究チームメンバーに限らず、自治体関係者をはじめ、地域のアーカイブ活動の専門家、旅行・観光業界を専門とするジャーナリスト、観光業関係者から幅広く情報の提供と協力を受けることができた。この事例収集の主たるものを以下に示す。

表1 視察・見学実施および情報共有事例(比較検討のための参考事例を含む)

国内	山形県南陽市	赤湯温泉御殿守など	国内	静岡県清水市	八木家
	宮城県仙台市	秋保温泉「伝承千年の宿 佐勘」		京都府京都市	「柊家」
	宮城県青根町	青根温泉「湯元不忘閣」		兵庫県神戸市	有馬温泉「御所坊」
	福島県会津若松市	東山温泉「向瀧」		兵庫県豊岡市	城崎温泉「西村屋本館」「三木屋」
	長野県軽井沢町	ヴォーリス建築群、軽井沢クアアセンなど		福井県永平寺町	永平寺宿坊など
	長野県山ノ内町	渋温泉「金具屋」		島根県松江市	松江しんじ湖温泉「皆美館」
	山梨県大月市	星野家住宅		愛媛県松山市	道後温泉、「ふなや」「宝荘」など
	東京都八王子市	網代園		愛媛県内子町	上芳我家住宅、文化交流ヴィラ高橋邸、内子座など
	神奈川県箱根町	「富士屋ホテル」「萬翠楼福住」「元湯環翠楼」「松の茶屋」「嶽影楼松坂屋旅館」「吉池」など		海外	チェコ共和国 プラハ、ブルノ
静岡県伊豆市	修善寺温泉「新井旅館」				

収集された事例、情報には、研究チーム及びプロジェクト協力者と共有して検討を加え、資源化及び流通プログラムの実施事例の選定、実施プロセスについて討議し、その結果を次のステップである資源化と流通のプロセスへと引き継いだ。

② 資源化及び流通プログラム

①理論的研究プログラムにおける事例の検討後、調査と資源化作業及び流通プロセスの実施について、了承と協力を得ることができた神奈川県箱根町「嶽影楼松坂屋旅館」(以下、嶽影楼)を資源化の事例として選択した。

資源化の作業は、嶽影楼が所蔵する文化財のうち、書画、写真資料などを中心に272点を選別し(表2)、非接触スキャナーによる電子データ化、資料の調査、ヒヤリングの結果を元にメタデータの付与を行った。電子データ化については、資料、作品の形状、形態の種類が多いこと、またそれぞれの保存状態、劣化の危険性などを考慮し、専門的な機材と技術を有する専門業者が作業を執り行った。(図1～9)

表2 資源化資料種類と件数

資料種類	件数	資料種類	件数	資料種類	件数	資料種類	件数
掛け軸	14	扁額	2	絵葉書	5	その他	8
短冊	29	絵画	6	35mm フィルム	36	合計	272件
色紙	32	写真資料	57	モノクロフィルム	83		

資源化の事例：嶽影楼所蔵の文化財



図1 関東大震災前の西洋式の建物だった嶽影楼



図2 関東大震災による被災、復興移転後の昭和10年代の嶽影楼

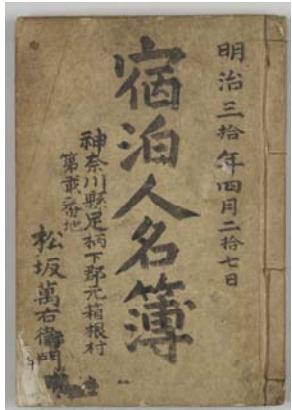


図3 明治30年の宿泊人名簿

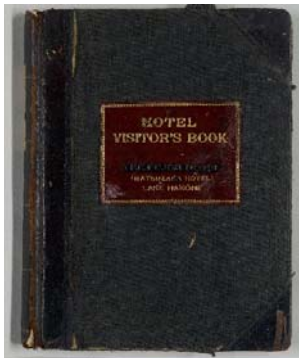


図4 1922年～1960年までの外国人宿泊者名簿

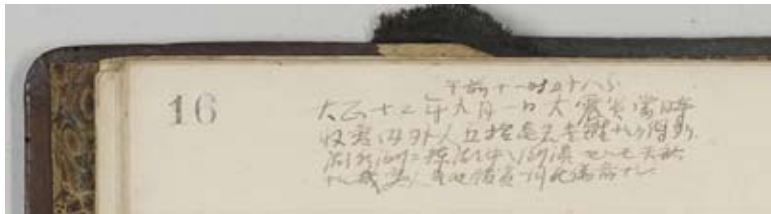
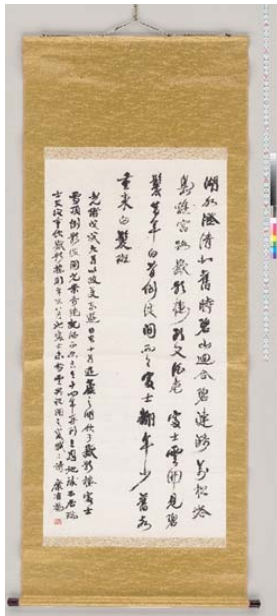


図5 関東大震災発生時の様子を伝えるメモ書き(図4外国人宿泊者名簿部分)



(上) 図8 康有為の詩に詠われたような、芦ノ湖と富士山の風景 (撮影：研究チーム)

(左) 図9 康有為『再遊箱根山頂芦ノ湖望富士山』(1911年)
中国清朝末期の思想家・政治家である康有為(1858-1927)の詩軸。
嶽影楼に宿泊した漢学者 諸橋轍次(1883-1982)によって発掘された
という。この詩軸に詠われた七言絶句2首から、康有為が1898年と
1911年の2回、箱根に来訪、嶽影楼にも投宿したことが分かる。

次に流通のプログラムとして、資源化された嶽影楼の文化財を観光行動の契機として、あるいは手引きとしていかに活用するか検討が重ねられた。ガイドブックのような形式、携帯に簡便なマップ形式、あるいはスマートフォンやタブレットなど、モバイル端末で利用可能なアプリケーションでの展開などが吟味された。そして実証的研究の立場から、可読性や簡便な頒布形態を探り、最終的にガイドマップ(A2サイズ、カラー表裏)と、そのガイドマップを元に地図アプリケーションと連動させた本研究のウェブサイトの2つの形式を採用した。(図10)制作されたガイドマップは、平成27年8月に開催した研究成果報告会、ワークショップにおいて公開、嶽影楼の立地する元箱根地区だけでなく、その他の箱根町の料飲施設、宿泊施設、また箱根町郷土資料館などの展示施設にも設置し、広く頒布する体制となった。

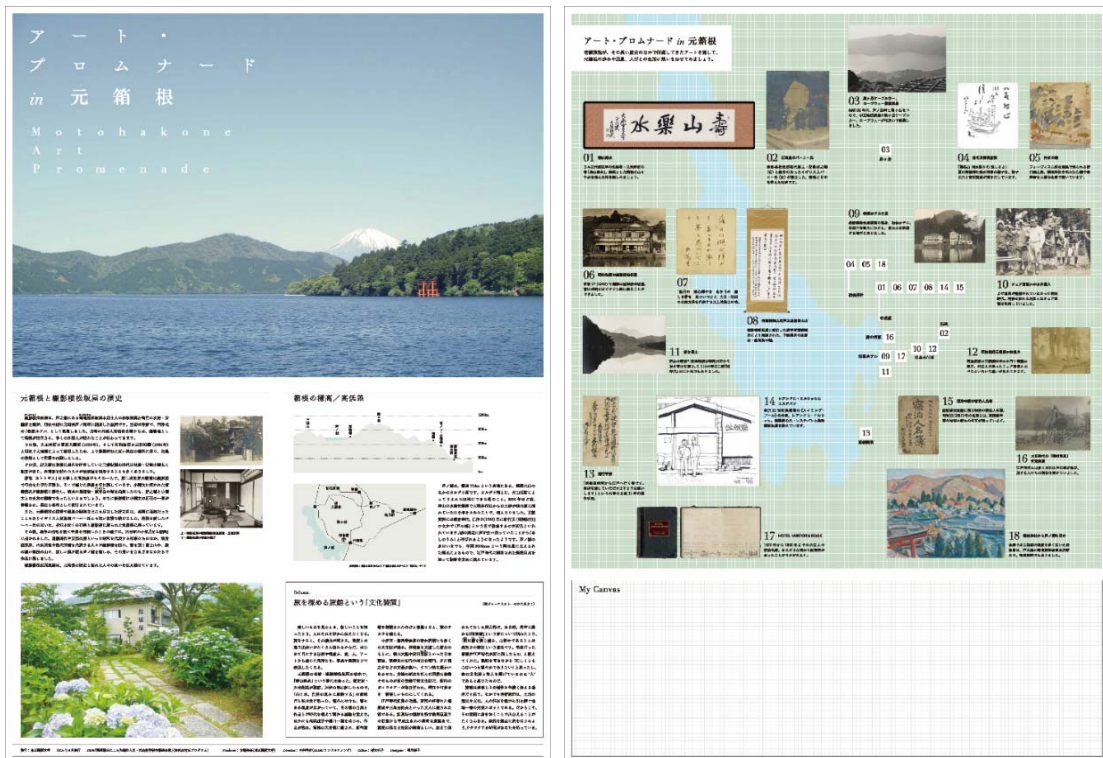


図10 ガイドマップ 「アート・プロムナード in 元箱根」

4. 研究成果及びそれがもたらす効果

次に研究期間の研究成果について、ガイドマップの活用とその効果を中心に報告する。

ガイドマップ「アート・プロムナード in 元箱根」

ガイドマップ「アート・プロムナード in 元箱根」(図 10)は、既存の観光名所や観光施設、食事処などの宣伝を目的とした観光ガイドマップや、自治体が作成する公共的、公平であることを基本としたガイドマップとは大きく異なり、次のように意図し、制作している。

- ・嶽影楼という場に立脚し、先人たちが句に詠み、詩に詠い、絵に表現した風景を採勝する。
- ・採勝する者自身の体験を記憶し、表現することを促す。

この制作意図に基づき、ガイドマップの編集作業では、収集、資源化された資料を、旅館の所在する箱根町元箱根地区に絞込んで整理し、旅館に投宿した人物たちが詠んだ詩や描いた絵画などの芸術的表現と、表現されたものに対する知見を軸に、彼らが眺めた風景をどのように巡り、地域の歴史を探訪することができるか、それをガイドマップにいかにか配置するかを討議した。ガイドマップの構成は、対象となる元箱根地区の箱根全山における地理的、歴史的な位置が理解できるように配慮し、図やテキストによる説明を加えた。また旅ジャーナリストのかたあきこ氏による旅と旅館文化に関するコラムを掲載、日本文化における「旅館」の位置づけを示し、地理、歴史、旅、日本文化という多角的な構成とした。さらに日本語だけではなく、海外からの訪日旅行者向けに、英語・中国語版を作成し、日本語版と同様に地域の施設に配布、設置した。

「アート・プロムナード in 元箱根」は、嶽影楼松坂屋を訪れた人々が見出した箱根の風景、情趣、彼らの表現の着想を辿り、ガイドマップを手にする者が、旅館において育まれてきた有形無形の文化を感得することを目指した。そして各々が感得したものを、何らかのそれぞれが思う形で表現し、第三者と共有していくことを期待するものである。このガイドマップは、いわゆる街歩きのためのガイドマップではなく、ガイドマップを持つ者自身において、時間をかけて芸術や文化を涵養するためのものである。効果については後述の本ガイドマップを利用したワークショップにおいて述べる。

成果報告会

資源化及び流通プログラムの実践事例とした嶽影楼松坂屋旅館(神奈川県箱根町)を会場に、本研究の報告会として、本研究テーマである民間所蔵の文化財の資源化及び流通に関して、研究チームを含めた4名によるトークセッションを開催した(図 11)。報告者と発表テーマは次の通り。(発表順)

- ・安藤 美奈(東京藝術大学)「研究プロジェクトの紹介:アートで深く旅をしよう 学術観光のすすめ」
- ・中村 佳史(株式会社 HUMI コンサルティング代表)「地域の文化資源のアーカイブ」
- ・美山 良夫(慶應義塾大学名誉教授)「小さなアートのまちとしての箱根」
- ・山崎 茂雄(福井県立大学教授)「野外博物館としての箱根の魅力」

報告会には、元箱根地区住民だけでなく、隣接するの三島市の住民も参加、また箱根町郷土資料館、ポーラ美術館(神奈川県箱根町)、ベルナール・ビュッフェ美術館(静岡県長泉町)関係者、文化観光分野の実務者や研究者、朝日新聞社記者ら20名ほどが出席、意見を交換した。

ガイドマップを活用したワークショップの開催

前出の報告会と同日、箱根を中心に活動する<はこねのもり女子大学>(一般社団法人はこねのもりコンソーシアムジャパン、以下「はこじよ」と共同で、本ガイドマップを用いた街歩きワークショップを開催した。報告会とワークショップを開催した平成27年5月、気象庁が箱根山の噴火警戒レベルを2(火口周辺規制)に引き上げたため開催実現も危惧されたが、ワークショップは30名をこえる参加者を迎えて実施することができた。ワークショップは、嶽影楼を起点に芦ノ湖半に沿って箱根神社まで、ガイドマップを手にした歴史や風景

を鑑賞していく内容で、箱根観光ガイド協会所属のガイド、箱根神社宝物殿の学芸員でもある権禰宜の方々の協力によって、情報の質、量としても豊かな探勝の機会となった。ガイドマップは紙面という媒体の特性から、文字と画像の二次元の情報に限定されるが、解説や質疑応答の「人が語る」双方向の伝達と、実際の風景や場を五感を通して体験することにより、知的かつ立体的な体験が可能となった。



図 11 成果報告会の様子 発表者 中村（左上）、美山（右上）、山崎（左下）



図 12 「はこじょ」との共催ワークショップ
箱根町観光ガイドによる解説風景（賽の河原）



図 13 「はこじょ」との共催ワークショップ
箱根神社権禰宜による解説（箱根神社境内）

また、ワークショップ終了後、自記入式のアンケートを配布し、ガイドマップ利用に関する意見を収集した。アンケートでは、属性のほかに、①「箱根」に対して抱くイメージ(自由想起)、②ガイドマップを使うことによって新たに感じたことや考えたこと、③ガイドマップに対する意見・感想を聞いた。

ワークショップ参加者アンケート集計結果(有効回収票 15 件)

表 3 属性

年代	20代	40代	50代	70代
(人)	7	5	2	1
居住地	東京都	神奈川県 (箱根町以外)	箱根町	その他
(人)	5	4	3	3

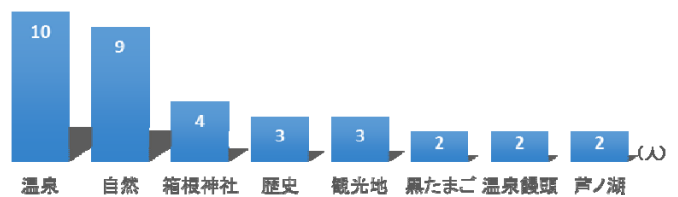


図 14 ①箱根に対して抱くイメージ

表4 ②ガイドマップを使うことによって、何か新たに感じたこと、考えたこと（自由回答形式）

20代	キレイな画像と解説がついていて新たな発見を得ることができた。箱根の地形的な特徴などを 知る ことができた。マップの部分は直観的に使うことができ、文字数も多くないため非常に観やすくなっているのがよかった。	40代	これだけ人々が集まる箱根のちょっと前の時代背景をしれるとは楽しいと感じた。ただ観光に来て、食べて、自然をみて、温泉も良いけど、やはり 歴史を知る というのは、どうやって今につながっているのかを 知る ことは魅力の再発見になり、来る楽しみ方も変わってくると感じた。
	今と昔の箱根を比較することができ面白かった。ここにはこんな意味があるんだというところを 知る ことができて、より身近に箱根の 歴史 を感じる事ができた。		今まで知らなかったアートや 歴史 資産が掲載されており、とても勉強になる。デザインやコラムなどのクオリティが高い。写真のクオリティも高いと感じた。
	普段はただ歩くだけで通り過ぎてしまうようなところも細かく説明があつて、 知る ことの楽しさをした。飽きる事が無かった。		箱根の観光だけでなく 歴史的 な面を勉強することができた。
	新たな 歴史 発見になった。写真がたくさんあって見やすかった。箱根には昔から外国人とのかかわりがあったのだと感じた。		観光名所だけでなく箱根の深い 歴史 を 知る ことができる。
	細かい 歴史 を 知る ことができた。何気なく通り過ぎてしまうようなところにも 歴史 があり、とても興味深かった。		景色や文化、レジャーだけではなく、 歴史 を感じることで、奥行きのある箱根を楽しめた。
	おしゃれで見やすい。日本史を勉強しなおしたいと思った。		50代
あまりマップという印象がなかった。各説明（地図）をもう少し詳しくしたほうがよいと思う。デザインや写真はきれいだと思う。	70代	今まで勉強した分がずいぶん少な過ぎたという感じで、もっともっと勉強しなければならないと感じました。いつもながらお話を伺うと目からウロコという感じです。	

本ワークショップはくはこじょ>との共催であることから、箱根に興味関心のある参加者が多いと推察された。しかし箱根に関心のある参加者とはいえ、箱根には「温泉」「自然」というイメージが強いということが、アンケートからわかる(図14)。同時に本ガイドマップの利用体験の効果という観点からは、「歴史」「知る」という言葉で表された肯定的な回答が多く見受けられ(表4)、参加者に対して、彼らが箱根に抱く「温泉」「自然」というイメージだけではなく、学術的な観光行動、いわば観光地に楽しみ方を提示できたと言えよう。このような効果が示すように、今回開催協力を得たくはこじょ>のような、民間の発意による地域興しやその活動団体を学術の面から支援し、これまで関与していなかった地域の文化財に気づかせ、継承する役割を認識させることで、地域力の創出へとつながる発展的な可能性があると考えられる。



図15 神奈川県主催 東海道ウォーキング in 箱根宿で配布されたコースガイド

資源の流通の事例

ガイドマップの公開後、平成27年11月14日に神奈川県が主催した参加体験型イベント「東海道ウォーキング in 箱根宿」のコースガイドの配布媒体に、電子データ化した資料を提供する機会を得た(図15)。このイ

イベントは、東海道をテーマにした神奈川県内の川崎から箱根までの宿場町を歩きながら、宿場の魅力を知ることが目的としている。この箱根でのウォーキングには、約 150 人が参加、こうした流通の機会には、電子データとして資源化された特性が活かされた例である。その他、箱根を事業拠点の一つとする鉄道会社の沿線地域を紹介するイベントにおいて、ガイドマップを配布する機会を得(平成 27 年 9 月)、今後もこのようなさまざまな媒体や機会、資源の活用機会の拡大を図っていきたい。

まとめ

本研究で対象として取り上げた旅館営業施設は、平成 24 年度末時点で平成元年から 4 割以上倒産・廃業となっており(出典:2014 年「特別企画:ホテル・旅館経営者の倒産動向調査」帝国データバンク)、その 4 割近くは業歴 50 年以上の老舗施設である。経済状況の変化や災害に起因する宿泊客数の変動、建物設備の基準改正、さらには「民泊」という業態の参入など、旅館の経営環境は厳しさを増す傾向にある。50 年、100 年と続く老舗旅館は、地域の歴史を語り継ぎ、旅行という観光行動には欠かせない施設である。また老舗旅館は、日本の多くの家庭から失われている和室の設えや食事、宿泊などに関わる日本文化を体験できる文化装置でもあり、国内の旅行者だけでなく、外国人訪日旅行者に向けても重要な観光要素の一つである。しかし既に述べたように、こうした老舗旅館の所蔵する文化財は、民間で受け継がれてきたがゆえに所蔵目録などもない場合が多く、世代交代あるいは所有者の移転によって資料や作品の来歴や逸話を語り継ぐことすら困難な状況に直面している。民間所蔵には、公有化された場合よりも、保管、公開展示することだけでなく相続、継承という現実的で深刻な問題が伴う。こうした問題をすべて解決することは困難であるが、本研究の成果が示したように、資源化することにより情報が記録され、さまざまな形をとりながら流通することによって、人々の記憶に残り、歴史を継いでいくことは可能であるといえよう。

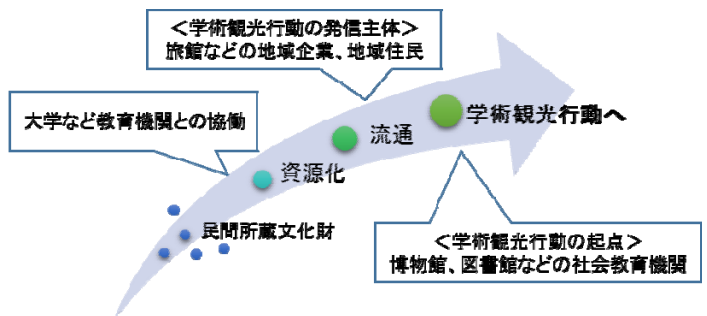


図 16 学術観光行動へのフロー 研究チーム 美山による指摘(平成 25 年度 委託業務実績報告書)を元に作成。

図 16 は、研究チーム 美山が指摘した学術観光プログラム創成に向けた課題を元に、民間所蔵文化財の資源化と流通から学術観光行動へと向かう流れを示している。学術観光行動へのフローを実社会に対応するプログラムとして実施するには、実務者との協働体制とともに、各プロセスにおける活動主体、活動の起点となる機関が必要である。そこで従来の観光業の枠にとらわれず、大学

や博物館など高等教育機関、社会教育機関の機能を再確認し、プロセスでの役割を担うことを提案したい。まず資源化における調査、評価といった学術的役割を、大学など教育機関と協働する。流通における情報発信の主体として、文化財の所有者とともに地域住民の参画を促す。ここには本研究のワークショップの協力団体に見るような、民間の活動団体も含まれる。また学術観光のプログラムの課題として、文化財の解説だけでなく、背景や人の思いなどを言葉に表し、社会へと還元する「語る人」の育成があげられる。これは意見交換を行った多くの研究者、実務者が指摘する重要な課題である。ガイドマップを用いたワークショップで示されたように、人が語る案内や解説の持つ力、影響力は大きい。地域の社会教育機関は、こうした課題への取り組みの場として、かつ生涯学習や人材活用の場として地域内にとどまらず外部との交流、すなわち観光行動の起点としての役割を担う。学術観光が目指すものは、地域住民をはじめ関係者が地域の歴史や文化財に対する理解と継承に積極的に関与し、さらなる地域の資源や魅力、地域力の創出へとつなげることである。そしてもう一方では、情報に左右されやすく表層的な見学に終始しがちな「観光客」という観光ターゲットを再考し、知的あるいは経験的な充実を目指して自ら考えて観光行動を起こす「観光者」の育成につなげることも、学術観光の目指すところである。短期的な消費行動とは異なる、自身で省察し行動する観

光者としての観光行動を促す。こうした行動により、観光者たる個人はより深く旅をすることが、こうした観光者を育成していくことにより、地域社会を含め観光に携わるものには、経済社会的な環境要因に影響を受けやすい「観光客」をターゲットとした観光モデルとは異なる、地域の文化に根ざし基盤となる「観光者」をターゲットとした観光モデルへとつながるのではないだろうか。

最後に、本研究により、アート・マネジメントと経済学、観光学、文化資源学、文化財保存学など、分野を横断した学術の連携が生まれ、芸術文化資源と観光の関係性について一層の理解の促進と研究の深化が期待される。ここで提起する学術観光という観光行動は、地域に対して、ひては観光という行動に対して深い理解を形成するためのプログラムである。資源化、流通を通して新たな学術観光という観光行動を創り出し、様々な地域資源と結びついたアート・イベントをはじめ、文化観光、アート・ツーリズムへの寄与、関連する産業・事業などの振興の一助になることを望む。

【研究成果の発表状況等】

○論文、報告書(計3件)

- ①美山 良夫、「プラハにおける《学術観光》創成事例検証 地域力のための《学術観光》プログラム創成に向けて」
課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業平成26年度 委託業務実績報告書、2015年3月
- ②山崎 茂雄、「民間所蔵文化財の資源化・流通による学術観光創成の実証的研究(チェコ共和国調査結果概要)」、課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業平成26年度 委託業務実績報告書、2015年3月
- ③安藤 美奈、「旅館所有文化財の観光資源としての活用と諸問題」、一般社団法人芸術資源マネジメント研究所研究誌、第1号、2016年6月発行予定(掲載決定)

○著作物(計2件)

- ①ガイドマップ「アート・プロムナード in 元箱根」 A2サイズ 1枚両面(日本語、英語、中国語)、2015年8月、東京藝術大学発行
- ②神奈川県 東海道ウォーキング in 箱根宿 コースガイドマップ A4サイズ 1枚両面、2015年11月、イベント主催:神奈川県、協力:箱根町、はこねのもり女子大学、協賛:キリンビバレッジ株式会社、ミズノ株式会社、箱根甘酒茶屋

○学会発表等

- ①日本アート・マネジメント学会第17回全国大会 分科会 E 地域資源
安藤 美奈 「民間所蔵の芸術文化資源を用いた観光行動の深化の試み」、2015年11月29日、会場:名古屋芸術大学、約30名
- ②一般社団法人芸術資源マネジメント研究所 2015年度 第1回 文化観光研究会
安藤 美奈 「アート・プロムナードin元箱根 が目指すもの」、2015年10月21日、研究者3名 一般1名、会場:社中交歓萬來舎(慶應義塾大学南校舎3階)

○本事業で主催意見交換会、研究会、共催ワークショップ等

- ①民間所蔵文化財の資源化・流通による学術観光創成の実証的研究に関する意見交換会
会場:東京都千代田区ビジネスエアポート丸ノ内会議室、2015年2月26日、研究者1名、実務者5名
- ②民間所蔵文化財の資源化・流通による学術観光創成の実証的研究成果報告会
会場:嶽影楼松坂屋旅館(神奈川県箱根町)、2015年8月9日、研究者5名、一般約15名
- ③共同開催<はこね歴史Walk授業> 会場:神奈川県箱根町、2015年8月9日、研究者5名、一般約20名
- ④共同開催 市民大学院 研究会 安藤 美奈「旅館の文化財を伝える」
会場:京都市 成徳学舎(旧成徳中学校)、2015年10月24日、研究者10名

○ホームページ <http://gakujutsukanko.com/>